

# ●はなせ診療所そよ風だより No61

2015年10月 内科 吉澤泰介

## ●西の早川、東の日野原。

西の早川一光(はやかわいっこう先生、91才)、東の日野原(ひのはら先生101才、日本で今最も先進医療で有名な病院の一つ東京の聖路加“せいろか”病院)と呼ばれ、日本の戦後の医療を牽引してこられた超ご高齢のお二人の先生が、今も現役でご活躍中です。

私など早川先生のヒューマニズムあふれた苦しめて、悩める者への優しい温かい眼差しに若き日、惹かれ感動したものでした。先生は最近、病に伏されましたが、そこから達した境地とは、医者とは、治すことが一番と思っていたが、長い人間の様々な人生とお付き合いしていると、治せずに、老いを迎えたり、治せずに死ぬことばかりで、そもそも医者が治すなど、厚かましいのではないかと思うようになりました。老いれば、治らない、治せないと言ったほうが、正直なのではないかと。それが怖くて、言い切れないばかりに、治しましょう、この薬を飲んでしばらく様子を見ましようと言って誤魔化しているのが、今までの医療ではないかと。老いは治せない、治らないと、死は避けることができないと、みんなが思った時、医療に頼らず、医者にも頼らず、自分の人生は、自分で引き受ける、己が終末を、自分で覚悟し責任をもち、結論付けていく。各々の生死のなかに仏を見つけていくような自覚こそ、本当の、デモクラシーではないかと。今までぼくらが、中途半端に引き行けてしまっていたからこそ、支えきれないのに、もたれてずっと辛抱しているような医療だったのではないかと、91才になってやっとこのように自覚できたというのが、正直な感想ですと、おっしゃってられました。(以上、最近出版された、わらじ医者の来た道より、一部改編しました)

思えば、早川先生の世代は、第二次大戦後、日本中が物不足となり、貧困の克服、国の復興が第一の優先順位でした。現代の世界に目を向けると、かつての日本の如く、物質的貧困のために苦悩する国々が多い中、奇跡的復興を遂げた現代の日本は、物や言葉があふれすぎたことによる心の貧困を克服することが、緊急かつ最重要課題になっているように思われます。

## ●癌と、認知症予防が、現代医学の喫緊の解消課題となっています。

◎最近の認知症、物忘れに対する漢方のお話し。

最近物忘れがひどくなって、剣道の師範の試験が受けられないという方が、ボケ防止の煎じ薬(遠志“おんじ”)、石しょうこん(共に頭をすっきりさせる作用あり)、当帰、川きゅう(血の流れをよくする)を1ヶ月間服用にて、記憶力が回復し、見事試験もうかったという方がおられました。

◎癌に対しては、煎じ薬の、丹参(たんじん)、しつりしで、癌の血液マーカーが4000から3000位に下がった。癌は東洋医学では血が停滞しとどこおるととらえ(お血という)、その滞りを解消する漢方を出します。